

Young Officials' Camp 2015

参加報告書

函館地区バスケットボール協会

大内 翼

1 期日

平成 27 年 8 月 14 日 (金) ~ 16 日 (日)

2 会場

埼玉県立スポーツ研修センター

埼玉県立神尾運動公園体育館

3 参加者

25 歳以下の日本公認審判員

男性 23 名 女性 17 名 計 40 名

4 日程

8 月 14 日 (金)

12:30 受講者受付

13:30 開講式

13:50 実技 I 「よりよいプレゼンテーションの
基本 体幹をつくるトレーニング
・アジリティトレーニング」

17:00 入室・更衣・入浴

18:00 夕食

19:00 講義 I 「FIBA Head of refereeing の講話」

21:00 班別ミーティング

23:00 消灯

8 月 15 日 (土)

6:30 起床・洗面・部屋掃除等

7:00 朝食

9:00 実技 II 「高校生男女モデルゲーム」

18:00 夕食

19:00 講義 II 「YOC から世界へ」

19:20 講義 III 「ルール・マニュアル」

20:40 閉講式

21:00 班別ミーティング

23:00 消灯

8 月 16 日 (日)

6:30 起床・洗面・部屋掃除・片付け

7:00 朝食

8:00 部屋点検

9:30 実技 III 「高校生男女モデルゲーム」

(各自帰りの交通機関にあわせて随時解散)

5 講義参加報告

◇講義 I 「FIBA Head of refereeing の講話」

講師 : Mr. Carl Jungebrand

(FIBA Head of refereeing)

・「Do you want to referee the final of the Olympic Games or the World Cup?」という話から始まった。10年後の自分をどうするかを決めるのは自分でしかいない。だから、常に自分を見つめ返すということが必要になってくる。私生活と審判はリンクしているので、普段の生活から自分自身を律することが必要となる。

・フィジカルトレーニングがとても大事となってくる。フィジカルトレーニングで鍛えるものとして「スピード」「身体の強さ」「柔軟性」「回復力」というものが挙げられる。曖昧にされがちではあるが、食事・回復までがフィジカルトレーニングである。また、試合後のストレッチを大事にすべ

きである。

・審判はサービスプロバイダ（サービスを提供するもののこと。）になるべきである。審判が全てをコントロールしなければならない。信頼関係を築くということが大事だが、そのためにすべての責任を持ち謙虚に試合に取り組むべきである。それが言葉以外のメッセージに繋がる。

・ボディランゲージを多く取り入れること。身体の小さい人は特に身体を上手く使うべきである。自信がなければ外に見えるので強い心を持つように心がける。そのために審判は心身共にアスリートになる必要がある。

・マニュアルが改定される。主にこの研修ではリード・オフィシャルの見方について学んだ。リード・オフィシャルは45°の角度を保ち常に判定をする。(open angle) ベースラインと平行になるということはない。

・自分のエリアをまずは判定をする。(primary coverage) プレイの始まり→経過→プレイの終わりを常に頭で予測し考えることが重要。

・千回行えば身体に記憶される。考えなくて身体が自然と動くようになる。

・1番は必ず判定する場で正しい位置で吹くこと。但し、プレイから一定の距離を保つようにする。近づきすぎるのは良くない。(例：高速道路で目の前を車が通るとはつきりとは見えないが、離れた位置からみれば車は遅く見ることができ、よく観察することができる。)

・フロントコートのベースラインで選手にボールを渡すときは笛を鳴らす。(Warning Whistle) 又、口に笛をくわえ続けるのは良くない。積極的にコミュニケーションをとる。マニュアルの改訂でファウルを犯した選手を指さなくなったが、笛をはずして「○番ファウル」と、話しをしてほしいという意図がある。それがまた、説得力に繋がる。

◇講義II「YOCから世界へ」

講師：加藤 誉樹 氏

・YOCへは公認1年目、大学4年生のときに参加をした。現在では国際審判員として多岐にわたり活躍をされている。

・ABCとは何か。

「(A) 当たり前のことを (B) 馬鹿にしないで (C) ちゃんとやる。」

審判として、当たり前のこととは、「笛を吹くこと。」

「ファウルをとりあげること。」「ヴァイオリオンを正しく判定する。」などが挙げられる。

では、なぜこれらのことをするのか。

多くの回答があると思うが、一つをとるとすれば、試合の勝ち負けがかかっているからということだ。審判がなぜいるのかというとグレーを判定するため。そのグレーを判定するために審判は努力を続けなければならない。これらは、高いレベルを吹くときでも高校生、中学生を吹くときでも変わらない。いつでも当たり前のようにしていくということが大事である。そういった努力をしなければ、信頼を失うことに繋がる。そして、「ABC」は審判だけでなく、普段の社会の中でも大事となる。

◇講義III「ルール・マニュアル」

講師：平野 彰夫氏（規則グループ長）

・Cylinderの概念を理解し確認をする。

第33条.1 プレイヤーの位置とシリンダーの考え方 「プレイヤーがコート上で普通に両足を開いて位置（ノーマル・バスケットボール・ポジション）を占めたとき、そのプレイヤーが占めている位置とその真上の空間をシリンダーという。シリンダーの範囲は、次のように決められる。」①前は、手を普通に挙げたときの手のひらの垂直面。②うしろは、尻の垂直面。③両脇は、腕と脚（足）の外側の垂直面

第33条.3 正当な防御の位置（リーガル・ガーディング・ポジション）

①「防御側プレイヤーが相手チームのプレイヤーに向かい合い、両足を普通に広げて床についたとき、その防御側プレイヤーは最初の正当な防御の位置を占めたことになる。」

②「正当な防御の位置には真上の空間も含まれるので、真上の空間の内側であれば、まっすぐ上に手や腕を上げたり真上にジャンプしてもよい。」

このような規則をしっかりと理解しなければならない。

・上記の確認をした上で映像を使い多くのパターンの映像を見て、ファウルなのか、チャージングであるのか、ノーコールであるのかをディスカッションした。シリンダーの考えにさらに着目をし、こだわらなければならない。どちらに接触の責任がどちらにあるのか、このことをもう一度考えるべきである。

・自分たちが吹いた試合はもちろんのこと、映像でこのように確認をしたりして、ストックを増やしておくということも大事。

・映像を見ればわかるが角度が違うだけでこれだけスペースの見え方が違うということを意識すべきである。そのために「ボクシング・イン」「オールウェイズ・ムーヴィング」「スペース・ウォッチング」「ペネトレイト」の4原則がある。

6 実技参加報告

◇実技Ⅰ「よりよいプレゼンテーションの基本

体幹をつくるトレーニング・アジリティ トレーニング

講師：野田 拓司 氏

選手は日ごろから毎日トレーニングを行っている。審判員ももちろん同じようなトレーニングを行う必要がある。また、平均として1試合を通して100往復を走る。走るチームであればこの数よ

りも多くコートを走らなければいけない。その中で集中力を保ち選手のために判定を下していかなければならないのが審判である。但し、走れるというのは当たり前である。そのためにトレーニングとして、長時間のランニング、短距離のダッシュ、スプリント走など様々な走り方のトレーニングを日ごろから行う必要がある。この中でもスプリント走は審判をする上で一番必要となってくる。そして、判定を下すためには必ず前を向いていなければならない。普段の生活はもちろんのことトレーニングする際にも前を必ず向いて正しい姿勢でトレーニングを行うべきである。

・まとめ

実技Ⅰでは、講義を受けた後、主に走りのトレーニングを行った。今回は3時間のトレーニングではあったが、特に私は姿勢を意識しながら行った。胸を張るといってできている部分があり、意識しながら断続的に行ったが難しかった。走り込みを続けていくと、やはり、姿勢が自然と悪くなる。日ごろのトレーニングからこういった追い込みということをしながらか自分の走り方のフォームを見直していかなければならないと感じた。また、体幹トレーニングの必要性を知ることができた。判定をするときは必ず止まって判定を下す。走りながらバランスを崩さずに止まることは難しい。そのために身体の体幹を鍛え、身体の重心がぶれないようにトレーニングする必要がある。体幹トレーニングは家の中でもできるトレーニングであるので毎日行うようにしたい。今回は日ごろすることができない体育館の中での走り込みということを行った。私自身これまでトレーニングを積んできたとは思っていたが、まだまだ足りないのだと感じることができ、とても貴重な経験をすることができた。

◇実技Ⅱ・Ⅲ「高校生男女モデルゲームを使い実技講習」

10名1グループの班をつくり、それぞれ4,5名の講師がつき、ご指導をいただいた。私の班の講師は、大野健男氏、安西郷史氏、堀内純氏、平野彰夫氏であった。モデルゲームは10分-2分-10分（第1、第4ピリオド扱い）試合間5分であった。

(1) 8月15日 第2試合 10:15～

ふじみ野 - 都立駒場 (女子)

主任: 堀内 純 氏

主審: 平田 悠 (和歌山県)

副審: 大内 翼 (北海道)

本ゲームでは、手の使い方を整理するところポイントとなった。どちらのチームもボールマンに対して、オフボールでのバンプをするプレイヤーが手を使うといったプレイが多く目立った。最初から手を切るということはできたが、連続して取り続けるということが後半のピリオドで無くなってしまったことが反省としてあげられる。一貫性を保つためにはやはり、同じプレイには笛を入れ続けなければならない。勇気と決断の必要性を感じた。また、前日の講話の話でリード・オフィシャルは45°の角度で見続けるということにチャレンジをしたが普段とは見る視野が変わり迷うことが多々あった。

講評

本ゲームについて、堀内氏、平野氏及び須黒氏より以下のご指導をいただいた。

【堀内氏】まずは、見栄えをもっとかっこよく見せるべきである。姿勢が少し前かがみになっているため、弱く見えてしまうところが多々ある。常に意識をして姿勢・見栄えというところを今以上に工夫するべきである。リードでの味方の部分は意識をしているが、ところどころでベースラインに対して平行になってしまう部分が見られる。

【平野氏】リバウンドに関しても支柱近くに寄ってしまうということが多々あった。癖になりつつあるのでボードの下にははいらないようにして外から見るということを心がけるようにしたほうがよい。

【須黒氏】ファウルの基準を明確にするべきである。してはいけないものに関しては吹き続けるようにしなければならない。アウト・オブ・バウンズやトラヴェリングの判定が曖昧な場面がある。

(2) 8月15日 第9試合 15:30～

人間向陽 - 竹台 (男子)

主任 平野 彰夫 氏

主審 佐々木 尚人 (宮城県)

副審 大内 翼 (北海道)

本ゲームでは、「一貫性」の大切さを学んだ。試合開始前平野氏から「このチームはずっとトラヴェリングが多いが（特に1.2.3のミート）ここまで吹かれていない。」と一言アドバイス（課題）をいただいた。私自身これまで、トラヴェリングを意識して1試合全て吹き続けたことがなかった。しかし、この試合の中では私自身の中で意識し判定を続けることができた。また、吹き続けていく中で選手同士やコーチの方からの注意などもあり、前半よりも後半のトラヴェリングが少なくなった。このことから、一貫性を保つということの難しさと大切さを知ることができた。前試合からのつながりという観点から見ると、リード・オフィシャルのとき意識をしていないときには、やはりボードの下に入ってしまうということがあった。長方形の延長線上より外で見るということを意識して次のゲームに臨むように自分自身の中で反省をした。

講評

本ゲームについて、平野氏から以下のご指導をいただいた。

【平野氏】トラヴェリングについては、吹き続けられていてよかった。選手自身もトラヴェリングをしないように心がける意識がついてきていたので、今のコート上で吹き続けられたという気持ちを忘れないでもらいたい。だが、ニュートレール・オフィシャルへと変わるとき選手より先に走ってしまうことがあるので、「ボールの左うしろ3～5mほど離れた位置を追従していく。」というところをもう一度意識し直していくべきである。

(3) 8月16日 第3試合 11:00～

朝霞 - 小山台 (男子)

主任 大野 健男 氏

主審 岡山 幸二 (福岡県)

副審 大内 翼 (北海道)

本ゲーム、ではディフェンスプレイヤーの手はもちろんのことオフェンスプレイヤーの手の使い方もイリーガルなものが多く、見なければいけないプレイが数多くあった。だが、何本かオフェンスファウルや手を使ったファウルをとりあげていたが、周りから見ているともっと笛をいれなければならない場面が多くあったということだった。目に見えたものは判定をできているが、数か所で起きているプレイを最初からとらえ判定を下すということはできていなかったため、技術をあげるのはもちろんだが、二人のコンビネーションで10人を見るということが必要となってくる。相手の審判とさらに多くのコミュニケーションをとらなければならないと感じた。

講評

本ゲームについて、大野氏より以下のご指導をいただいた。

審判は選手のために判定をしなければならない。リード・オフィシャルから45°の角度で見る。ボードの下にはいらない。という目標を掲げているのはいいが、そのことによって右に行って判定す

るということが疎かになっていた。3番エリアから5番エリアへのドライブなどの判定ができていない場面があった。それはそのプレイに対する判定が全くできていないということと同じである。もっと積極的に右に移動してみるようにした方がよい。そのためにさらに工夫を重ねる必要がある。インサイドプレイヤーの攻防は最初に仕掛けた方を必ず捉えておく必要がある。審判がしてはいけないことは、白なものを黒にしまうことである。このミスを犯さないためにもイリーガルなコンタクトを見極め、そのプレイヤーを観察しておかなければならない。

7 総括

この3日間、日本を代表する講師の方々、全国の同世代の審判の仲間と同じ空間で共に生活をするのができ、大変有意義な時間を過ごすことができた。この研修の中で私自身ももっと意識しなければならないと思ったことの一つとして、「見栄え」というところがある。Mr,Carlの講話の中で実際に笛を吹いてジェスチャーを行ってもらったのがあったのだが、私の中ではとてもインパクトがあった。ジェスチャーひとつをとっても説得力があり、選手は見られているという意識が出るのだと肌で感じることができた。なので、普段の私生活から姿勢を良くするというのを心がけていきたい。

また、45°の角度から見るという新しいマニュアルを実践することができたが、初めてやることであるので難しさを感じた。だが、意識をすることで早くマスターできるように努力をしていきたい。ルール・マニュアルを理解するということは審判技術を向上させるという上では欠かせない。そして、ただ読むのではなく、理解することが大事である。例えばシリンダーの概念をしっかりと理解することができれば、ファウルを判定するこ

とはそうそう難しくはないと講師の方がおっしゃっていた。まだまだ、その部分で私は未熟だなと感じた。さらにルールブックを読み込む必要がある。

この研修会では、私自身の課題はもちろんのこと新たな課題を発見することができた。今後も自己研鑽を怠ることなく、日々のトレーニングを重ねていく気持ちである。さらに「プレイヤーのために」を意識して今後も審判活動を行っていきたい。この研修を通して、同世代の方たちと交流できたことは私にとっての良い刺激になった。この経験を忘れずに次のステップへと繋げていきたい。

最後になりますが、このような貴重な機会を与えてくださいました、日本バスケットボール協会の講師の皆さま、北海道バスケットボール協会、函館地区バスケットボール協会の皆さまには心より感謝申し上げます。この経験をしっかりと活かしながら審判の技術向上に努めていきたいと思えます。ありがとうございました。

以上